『就実論叢』第51号　抜刷
就実大学・就実短期大学　2022年２月28日　発行

美術翻訳における言語と非言語表現の相関関係

The Correlation between Verbal and Nonverbal Expressions in Art Translation

武　部　好　子

就実論叢　第51(2021)，pp.15-31

美術翻訳における言語と非言語表現の相関関係

The Correlation between Verbal and Nonverbal Expressions in Art Translation

武　部　好　子（実践英語学科）
TAKEBE Yoshiko

キーワード

・美術翻訳　・言語　・非言語

目次

・はじめに
・1.　絵本翻訳と美術翻訳
・1-1.　共通点
・1-2.　相違点
・2.　美術翻訳における言語の役割
・2-1.　林原美術館（カタログ解説：お皿／屏風／能装束）
・2-2.　岡山県立博物館（キャプション：日本刀）
・2-3.　倉敷考古館（展示パネル解説）
・3.　美術翻訳における非言語の役割
・3-1.　画像写真の効果
・3-2.　教育的効果
・4.　美術翻訳における言語と非言語の相関関係
・4-1.　起点言語の立場：日本文化を翻訳する側
・4-2.　目標言語の立場：英語で日本文化を受け取る外国人来館者
・4-3.　異質化翻訳と受容化翻訳
・おわりに

はじめに

美術は時に言葉や文化を超えて人々を魅了することがある。日頃から美術に関心のある者はもちろんの事、特に関心のない者でさえ、作品の形や色彩によって感動する場合がある。美術作品は、他の非言語で表現される音楽・ダンス・スポーツと同様に、必ずしも言葉による説明を必要としない。それでは美術作品に関する言語的表現は不要であるのか。本稿の目的は、美術作品における言語と非言語の役割を検討し、非言語である美術作品を

理解しようとする外国人に対して言語がもたらす効果を考察することである。最終的には、美術翻訳における言語と非言語表現の相関関係を明らかにする。尚、本稿で扱う美術作品は日本の作品とし、日本語から英語への翻訳に焦点を当てる。

1. 絵本翻訳と美術翻訳

美術作品について翻訳を行うことは、絵画を伴う絵本を翻訳する事とどのような関係があるのだろうか。共通点と相違点を考察していく。

1-1. 共通点

共通点は３点ある。まず、両者とも非言語を主とした作品である点だ。絵本は小説と異なり文字ではなく絵をベースに物語が展開していく。同様に、美術作品も非言語である作品が主役となる。作品の色彩や形などの非言語だけでも十分に作品のメッセージが伝わる絵本や美術作品は、文字が読めない子供たちや、外国語を読めない外国人でさえ享受することが可能である。

次に、両者とも言語が脇役として非言語を支えている点である。絵本では絵を説明する文字によって物語に対する理解が深まるように、美術作品について解説している文字を読むことによって、作品が放つ意義をより感知することが可能となる。

最後に、特に翻訳の観点から、両者とも「記号間翻訳」が重要な鍵を握る点である。通常の翻訳は言語を別の言語に翻訳する「言語間翻訳」で完結するが、絵本翻訳や美術翻訳では、「言語間翻訳」だけではなく、言語のメッセージを絵画や音楽などの非言語で表現する「記号間翻訳」も行う必要がある。翻訳者は例えば「日本語」から「英語」に翻訳するだけではなく、その翻訳した言語のメッセージを非言語である絵本の絵や美術作品とも合致させながら翻訳する必要がある。これは、翻訳者だけではなく、絵本の読者や美術鑑賞者にも要求される。絵本の読者が絵を見ながら文字のメッセージを読むように、美術を鑑賞する来館者も作品を観ながら解説文を読み理解を深める。

1-2. 相違点

相違点も３点ある。まず、両者を読む年代が異なる点である。絵本の大半は子供を対象としているのに対して、美術作品は子供から大人まで幅広い層の年代を想定して翻訳される。

次に、両者を読む空間が異なる点である。絵本が個人の空間で座りながら読まれるのに対して、美術作品は美術館という公の空間で歩きながら鑑賞される。絵本は２次元の紙面上で物語が展開するのに対して、美術作品は３次元の立体作品として展示される。美術館が混雑している場合は個々のペースを維持するのは難しくなる。

最後に、特に翻訳の観点から、絵本を起点言語から目標言語に翻訳する場合に起点言語

や文化に忠実に翻訳する「異質化翻訳」を用いるのに対して、美術作品の場合は目標言語や文化に合わせて翻訳する「受容化翻訳」を用いる点である。子供の感覚や習性の多くは万国共通であり「そのまま」翻訳したほうが伝わりやすいのに対して、美術翻訳に登場する専門用語などは「そのまま」翻訳しても伝わりにくく、追加や削除によって全体のメッセージに対する理解度が高まる。

2. 美術翻訳における言語の役割

美術翻訳における言語の役割について、具体的に以下の３点の実践例を元に考察していく：（１）林原美術館（カタログ解説：お皿／屏風／能装束）（２）岡山県立博物館（キャプション：日本刀）（３）倉敷考古館（展示パネル解説）。

2-1. 林原美術館（カタログ解説：お皿／屏風／能装束）

現在、就実大学人文科学部と林原美術館との連携協定に基づいて、筆者が担当する「翻訳演習２」の授業において受講生と共に林原美術館のカタログに掲載されている作品の解説文について日本語から英語への翻訳プロジェクトを行っている。

2018 年度は「お皿」に焦点を当て、江戸時代の鍋島焼を中心にお皿の模様・デザイン・色彩・構成・技術などについて詳細な説明を行った。例えば、「月に描かれた兎」のモチーフについては、原文にはない日本文化に関する補足説明（「日本では月に兎が住んでいるとされ、兎は月を連想させる」）を英語で加えることによって、目標言語の英語鑑賞者が作品を身近に感じられるように「受容化翻訳」を行った。このような翻訳を行う事によって、お皿の右側を占める兎と、お皿の左側を占める丸い月との構成の意味がより鑑賞者に伝わる。

2019 年度は「屏風」に特化し、江戸時代の屏風に描かれている歴史的背景について詳細な解説を行った。絵本のように屏風には具体的な物語が展開されており、屏風に描かれている絵からだけではなく、言語を通して作者・登場人物・出来事の背景についての情報を得ることによって、屏風に描かれている緻密な人物像が鮮明に浮かび上がってくる。特に日本の歴史に馴染みのない英語鑑賞者には明確に伝わるようにしなければならない。例えば、源氏物語や平家物語を題材にしている屏風を翻訳する際には、屏風に描かれている敵と味方の位置関係を理解できるように「右側の源氏軍」と「左側の平家軍」について、コロン：やセミコロン；を用いて翻訳を行った。登場人物が発した言葉は、物語の臨場感が伝わるようにダブルクオーテーションを用いて短い台詞として翻訳した。

2020 年度は「能装束」に限定し、江戸時代の能装束に描かれている模様・構成・技術や能楽作品との関連などについて詳細な翻訳を行った。例えば、原文には模様として「鳴子」とのみ記載されている箇所を単に ***naruko*** とするのではなく、補足説明として「かつて日本で農民が鳥を寄せ付けないために用いた木製の道具」と英語で追加した。同様に原

文には「縫箔」とのみ記載されている箇所も ***nuihaku*** と記した直後に英語で「能で刺繍（縫）と金箔と銀箔で張り付ける摺箔（箔）の二つの技術で文様を現した女役と若い男役の装束」と括弧内に説明を加えることで、能装束の模様が制作された過程や、その能装束が実際に舞台で能役者によって着られた場面を彷彿させることが可能となる。

2-2. 岡山県立博物館（キャプション：日本刀）

前述の林原美術館と同様に、現在、就実大学人文科学部と岡山県立博物館との連携協定に基づいて、筆者が担当する「翻訳演習１」の授業において受講生と共に岡山県立博物館の日本刀に関するキャプションについて日本語から英語への翻訳プロジェクトを行っている。

今回の翻訳の目的は、日本語から英語に、言語を別の言語に置き換える①「言語間翻訳」を行うことであるが、それに際して、日本語を別の日本語に置き換える②「言語内翻訳（intralingual translation）：言語を同一言語内で言い換えること」（Jakobson 139）も行われた。筆者と受講生が日本語から英語への①「言語間翻訳」を円滑に進められるように、博物館学芸員によって、日本語の原文を一般来館者にとって理解しやすいように専門用語の多用を省き短く平易な日本語の文章に②「言語内翻訳」された。このように①「言語間翻訳」の前段階として②「言語内翻訳」を行うことによって、翻訳する側の理解度および精度を高め、最終的に一般来館者にとって読みやすく理解しやすい文章に仕上げることが可能となる。

「言語内翻訳」によって簡易な表現にするとはいえ、専門用語の全てを削除することは適切ではなく、日本刀について理解を深める上で鍵となる専門用語は残さなければならない。これらのキーワードとなる専門用語については事前に用語集として、受講生と共有し翻訳に役立てることが重要である。どの作品にも共通する用語を全体で把握することは、翻訳者側の共通認識として浸透させ、更に一般来館者側にもキーワードとして印象に残ることにつながる。例えば、どの作品にも登場する「刃文」という用語は ***hamon*** と記した後に英語で「焼き入れによって地鉄と刃の境に生じる模様」という説明を括弧内に記すことによって、日本刀の芸術性を印象づけることが出来る。

日本刀は ***katana*** として早くから海外に知られ、現在でもその美しさは外国人観光客に人気が高い。英語キャプションを付すことによって、日本刀の武器としての役割だけではなく、その歴史的背景や製造工程など日本文化の奥深さも発信できる。短い文章の中に豊富な情報を分かりやすく盛り込む必要がある。例えば、「乱れ映り」という言葉の後に分かりやすくかつ具体的にイメージしやすいように括弧内に詳しい補足説明がなされた:「乱れ映り（地鉄部分に現れる模様の一種で、淡く白い影のように見える）」。

時代や流派によって特色があることを強調できるように、流派や元号は日本語の呼び名を残しながら年号や英語で具体的な説明を記した。日本刀に興味のない外国人来館者に

とっては無味乾燥な印象を与えかねない作品についても「優美」「華やか」「上品」などの形容詞を英語で表現することによって、日本刀の洗練された美的要素を際立たせた。

2-3. 倉敷考古館（展示パネル解説）

前述の林原美術館や岡山県立博物館と同様に、就実大学人文科学部と倉敷考古館との連携協定に基づいて、筆者が担当する「翻訳演習２」の授業において受講生と共に倉敷考古館に展示されているパネル解説文について日本語から英語への翻訳プロジェクトを行った。

展示パネルの解説文は、展示室によって時代が区分されており、その時代の解説から始まり、事項解説、遺跡や遺物解説と続く。まず、エントランスにおいて「全体解説」を行う。ここでは温暖な気候に恵まれた吉備地方の経済的背景と共に発展した貴重な遺跡についての概要と、倉敷考古館の歴史および各時代に区分される展示室の紹介を行う。これらを英語で示すことによって、外国人来館者がエントランスの場で、全体像をより明確に把握することが出来る。

第１展示室では「旧石器時代」と「縄文時代」について展示しており、吉備の旧石器時代と縄文時代の人々の暮らしや、鷲羽山遺跡に関する技法、縄文土器と食生活の歴史などが解説される。第２展示室では「弥生時代」を特集しており、吉備の弥生時代の暮らしや、弥生土器、吉備の墳丘墓と前方後円墳の成立などについて説明を行う。第３展示室では古墳時代に特化し、吉備の古墳時代の暮らしや、土師器と須恵器の違い、前方後円墳などについて解説される。第４展示室では「飛鳥時代～中世」を網羅し、吉備の飛鳥奈良時代・平安時代・中世の人々の暮らしや、仏教と経塚、備前焼の時代的変換などについて詳述している。

上記の解説文は、日本語でも馴染みのない文章が多い為、起点言語においても、読みやすく分かりやすくする必要がある。例えば、「中世」については「考古学においては、中世とは平安時代の終わりから江戸時代の直前までの間のことをいいます。」と補足説明を行う。また日本語の具体例については英語では括弧にすることで、考古作品を当時の人々の暮らしと結び付けてイメージできるように工夫した。例えば、「石槍やナイフ形石器など、石器しか持たない人々」の下線部分の日本語は英語では「(e.g. stone spears and knife-shaped stone tools)」とした。

このように、日本語の展示パネル解説文を英語に「言語間翻訳」することによって、外国人来館者に対して、目の前にある異質な考古作品を単に傍観するだけでは得ることのできない感動や情報を効果的に提供することができる。吉備特有の地域性と芸術性を理解した上で、当時の人々の暮らしを具体的に想像しながら発掘作品を鑑賞することは、吉備の魅力をより感知することにつながる。

以上、美術翻訳における言語の役割について、林原美術館のカタログ解説／岡山県立博

物館のキャプション／倉敷考古館の展示パネル解説の翻訳プロジェクトを通して考察してきたが、特に日本の作品について日本語から英語に翻訳する場合は、明快かつ具体的に「言語間翻訳」する事によって、非言語である美術作品の存在意義を強調することが出来る。

3. 美術翻訳における非言語の役割

作品の解説文を日本語から英語に翻訳することによって、作品の制作過程や歴史について言語を通して外国人来館者が理解を深め多角的に鑑賞できる機会を与えてくれる。非言語の美術作品を理解する上で、言語は重要な役割を果たす。一方「絵本翻訳と美術翻訳の共通点」（1-1 参照）においても前述したように、絵本翻訳や美術翻訳では、例えば「日本語」から「英語」に「言語間翻訳」するだけではなく、「言語のメッセージを非言語（美術・音楽・舞踊など）とも合致するように翻訳する「記号間翻訳」（Intersemiotic translation）」（Jakobson 139）も行う必要がある。

ここでは美術翻訳における非言語の役割について、実際に上述のプロジェクトに参加した学生からの意見を取り入れながら、その教育的効果も合わせて考察していく。

3-1. 画像写真の効果

美術作品の解説文を「言語間翻訳」する過程において、その作品の画像写真（非言語）はどのような役割を果たすのか。「美術作品についての解説文（言語）を日本語から英語に翻訳する過程で、その作品の画像写真（非言語）の効果」について把握するため、これまでに筆者が担当する「翻訳演習１」「翻訳演習２」を受講し上記の美術翻訳プロジェクトに参加したことのある学生を主対象に質問を行った。（2021年９月22日「英語ゼミナールⅣ k」／2021年９月27日「翻訳演習２」：筆者担当科目 受講生 計30名（実践英語学科３年生・４年生）のうち25名の回答（全て自由記述形式）を得た（１人複数の回答））。

その結果、回答数の多い順番に（１）「翻訳者が選ぶ単語や表現を工夫」（２）「翻訳者の理解を深める」（３）「翻訳者が想像しやすい」（４）「翻訳者の関心を高める」に分類することができた。

【表１】

	＜美術翻訳（言語）の過程における作品画像（非言語）の効果＞
1	翻訳者が選ぶ単語や表現を工夫
2	翻訳者の理解を深める
3	翻訳者が想像しやすい
4	翻訳者の関心を高める

以下に全回答を分類毎に示す。

（1） 翻訳者が選ぶ単語や表現を工夫：

「選ぶ単語や文の構造を工夫することができる」「単語の意味の捉え方の間違いが減る」「翻訳しにくい部分や、文化的違いで解説を加えないといけない場合に適切な翻訳にできる」「絵本翻訳の時と同様に、様子や質感などの細かい描写を翻訳する時にとても役立つ」「Howの部分をより詳細に説明することができる」「絵や彫刻など文字を含まない作品にその作品にぴったりのキャッチフレーズなどインパクトのある表現を付け加えれば（文字化することで)、人を引き付けることに繋がる」「画像写真を見ながら翻訳することでより正確な訳をすることができる」「画像写真から感じたことや、そこから受けたイメージに合った単語で表すことができる効果」「英語特有の単語の使い方や表現が思い浮かぶ効果」「解説文と画像写真を組み合わせることでより正確に翻訳できる」「画像写真を解説文と一緒に見ることで、文章の情景、単語の意味を理解しやすくなり、より分かりやすい例えや解説につながる効果がある」「解説文をどう訳すか考える上で、画像写真を参考にすることで、より精密な訳をすることができる」。

（2） 翻訳者の理解を深める：

「翻訳する上で、日本語の文章が表すことを理解しやすくし、英語に翻訳しやすくなる」「言葉だけではどれだけ説明しても半分しか伝えられないような感じがするが、見ることで100パーセント理解できる」「非言語の物を説明するときは文字ではなく視覚（映像や画像）を通じての方が分かりやすい」「言葉で理解できないことも非言語である作品を観て感じることができる」「言葉だけで知るよりもより近く感じられて分かりやすい」「解説文をより分かりやすく理解させる効果」「分かりやすくなる」「解説文は美術作品を説明する役割があるので、その作品と比較し、解説文が本当にその作品を助ける役割が出来ているかを確認したり、その解説文を参考にしてよりその美術品に対する考えを深めたりできる」「その作品への理解を深めるひとつの方法だと思う。画像を用いることで、言語で伝えきれない部分を画像で補うことができる」「言葉だけでは理解しにくいことや、誤って認識してしまうことが沢山ある。そのようなときに画像写真があると、写真を見て確認できるので誤解が生じにくくなる」「解説文だけを見て翻訳するより、実際の作品を見ることでより深くその作品を理解できる」。

（3） 翻訳者が想像しやすい：

「初めて見る、知るものを言葉だけで理解するのは難しい。けれど、写真があれば言葉だけでは想像できない色や形が明確に分かるところ」「写真の美術作品が実際にどのように使われているのか想像しやすくなる」「文からだけでは分からないことをイメージすることができる」「日本の文化的特徴を視覚的に伝えやすい」「解説文だけでなく、画像から想像されるその作品の解説が追加されて、見る人がより想像を膨らませて鑑賞できる効果」

「解説文だけでは想像しにくい部分を画像写真で照らし合わせて確認できる」「画像写真があることで、イメージしやすくなる効果がある」「作品には沢山の魅力、特徴などがあると言われているが、飾られている作品を見ると実際に特徴などがあることは目に見える。前回、刀について画像を見ながらの方が翻訳しやすかったことから、画像写真の効果は、文字より画像の方が想像力を膨らませやすいと思った」。

（4） 翻訳者の関心を高める：

「美術作品の技法的な効果に関する知識がない人にとって作品に対する興味や関心がより高まる」「非言語の場合は、はっきり言葉で表さないため、逆に些細な表現も使う言語に関係なく、様々な人に伝えることができる」。

以上の回答からも分かるように、美術作品についての解説文を日本語から英語に翻訳する過程で、その作品の画像写真を見ることによって、選ぶ単語や表現をより精密に意識しながら工夫を行い、画像写真なしで翻訳する場合よりも作品に対して理解を深めることが出来る。また、画像写真を見ながら翻訳することによって、解説文における言語表現からだけでは把握できない作品の細かい特徴について想像しながら翻訳することができる。美術作品について背景知識のない翻訳者たちにとっても、画像写真を見ることによって、作品に対する親近感や関心を高めることに繋がる。

3-2. 教育的効果

このように筆者が担当する授業においては、自分たちがクラス内で行う翻訳が実社会に結び付くと実感できるプロジェクトを行っている。実際に上述のプロジェクトに参加した学生からの意見を取り入れながら、その教育的効果を考察していく。

「大学の授業で行う翻訳が、実際の美術館に展示される可能性があるプロジェクトの効果」について把握するため､これまでに筆者が担当する「翻訳演習１」「翻訳演習２」を受講し上記の美術翻訳プロジェクトに参加したことのある学生を主対象に質問を行った。(2021年９月22日「英語ゼミナールⅣk」／2021年９月27日「翻訳演習２」：筆者担当科目受講生 計30名（実践英語学科３年生・４年生）のうち25名の回答（全て自由記述形式）を得た（１人複数の回答))。

その結果、回答数の多い順番に（１）「一般的な分かりやすさ」（２）「実践的な経験」（３）「モチベーションの向上」（４－１）「責任感や緊張感」（４－２）「日本文化に対する理解」（５）「地域連携」に分類することができた。

【表２】

	＜大学の授業で行う翻訳が実際の美術館に展示される可能性がある点についての効果＞	
1	一般的な分かりやすさ	
2	実践的な経験	
3	モチベーションの向上	
4	責任感や緊張感	日本文化に対する理解
5	地域連携	

以下に全回答を分類毎に示す。

（1）一般的な分かりやすさ：

「実際の美術館に展示される場合、翻訳を見る相手は一般人であり、専門的な知識を持っているとは限らないため、より慎重に、誰にでも分かりやすい翻訳を心掛けるようになる」「どうやったら観光客に伝わりやすいかと工夫を凝らすため、相手に分かりやすく伝えるための能力が上がる」「より分かりやすく人のために翻訳するように心がける効果」「大学内だけでなく、外部の方々にも見ていただけるという点が、翻訳をする上で、より分かりやすくしようとする工夫や、読み取りやすさ、受け取りやすさなど、客観的に自分の解説を見ることができる」「一般的に理解してもらえる英語を書こうとする意識がより強まる」「読み手を具体的に想像できるため、より人が読みやすいような翻訳を作ることができる」「実際に展示される可能性があるということは、まったく日本語の分からない人たちに見てもらう可能性があるということで、どう表現したら分かりやすいかという事をより丁寧に考えて翻訳作業を行う」「誰が読んでも分かりやすい文章になるように心がけられる」。

（2）実践的な経験：

「大学生にとってはとても良い経験になる」「翻訳の実践的な経験を得ることができる」「実際の翻訳の仕事を意識して翻訳を行うことで、より真剣に取り組むことができる」「実際に展示されることを考慮して翻訳を行うことで、普段より実践的な翻訳をする良い機会になっている」「学生側には翻訳の仕事を類似体験できること、専門的な単語や知識を得ることができること、専門的な分野を翻訳する流れやコツなどを掴むことができる効果がある」「翻訳という職業への関心が増す効果」「美術館の解説文の翻訳を学生に体験させる効果」。

（3）モチベーションの向上：

「自分の翻訳が美術館に展示される可能性があると、学生もやる気が出る」「単に翻訳しただけで終わるのではなく、本当に自分が担当した翻訳を誰かに見てもらえる可能性があることが分かると嬉しくなってモチベーションがアップする」「多くの人に見られるので

モチベーションが上がる」「学生の授業へのモチベーションのアップの効果」「大学生の学習意欲を高めることができる」「学生自体が美術に関心を持ったり、翻訳関連のプロジェクトにまた参加したりする効果」。

（４－１）責任感や緊張感：

「正確に訳そうと緊張感を持って取り組める」「通常の宿題よりも責任感が生まれる」「漠然と翻訳するのではなく自分が翻訳したものが実際に展示されるかもしれないという緊張感が生まれる」「授業の為の翻訳ではなく多くの人に自分の言葉で伝えなければならないという責任感が生じる」。

（４－２）日本文化に対する理解：

「翻訳をした作品を外国人観光客だけでなく自分も深く知れるいい機会」「読み手である外国人来館者だけでなく日本の学生たちの美術品への興味･知識を深める効果がある」「作品への理解を深めることによって日本人でも知らないような日本の歴史や作品について学ぶことができる」「大学生にとって美術作品を知ったり、その作品が生まれた歴史や文化を学んだりするきっかけになる」。

（５）地域連携：

「地元の有名な美術作品やそれを取り巻く歴史的背景や文化について知らないことがどれほど多いかを課題に取り組みながら気づかすことができる」「学生たちが学んでいる内容を地域に発信することができる」「地域との連携を取ることができる」。

以上の回答からも分かるように、大学の授業で行う翻訳が、実際の美術館に展示される可能性があることを意識しながら翻訳作業を行うことは、実践的な経験として学生たちのモチベーションの向上に寄与している。美術館に来館する外国人観光客にとって読みやすい文章となるために、何よりも一般的な分かりやすさを目指して、各自の翻訳について責任感と緊張感を持って取り組む様子が見られた。同時に、日頃から英語に関心のある学生たちが欧米文化だけではなく、自国の文化や歴史を再認識し、地域と連携しながら地元に貢献できる教育的効果を見出すことができた。

4. 美術翻訳における言語と非言語の相関関係

以上、筆者が携わった美術翻訳のプロジェクトを通して、言語と非言語の両者の重要性について具体的に考察してきた。哲学者ネルソン・グッドマン（Nelson Goodman 1906–1998）は『芸術の言語』の中で表現について「言語が、世界や場合によっては絵を作るというわけではない。むしろ、言語と絵が、お互いを、そしてわれわれが知るものとしての

世界を作るのに寄与するのである」（グッドマン 102）と述べている。一方、翻訳家の野崎歓が『翻訳教育』において指摘するように、言語を扱う翻訳家は非言語を扱う音楽家と同様に芸術家である。「音楽家とはわれら翻訳家にとって最上の、理想的な役割モデルを提供してくれる存在である。原作を楽曲化する場合以外でも、一般に楽器を奏でる演奏家の行為とは、楽譜と聴衆のあいだに立ち、楽譜を音に「翻訳」する営みにほかならない」（野崎 80）。

この最終セクションでは、言語と非言語の相関関係について理解を深めるために、日本の美術作品について日本語から英語に翻訳する起点言語の側と、英語で日本の美術作品を鑑賞する目標言語の側について、両者の立場を翻訳の観点から明らかにする。

4-1. 起点言語の立場：日本文化を翻訳する側

日本の美術館に所蔵される美術作品について日本語の解説文を英語に翻訳する側にとって、出来るだけ日本特有の文化を英語鑑賞者にそのまま伝えることは使命ともいえる。「異質化翻訳」を通して英語鑑賞者が日本文化を異質なものとして捉えることが出来る。異質化翻訳（foreignization）とは、目標言語や文化に合わせるのではなく、起点テクストの異質性を認識させる翻訳方法である。“an ethnodeviant pressure on [target-language cultural] values to register the linguistic and cultural difference of the foreign text, sending the reader abroad” (Venuti 1995: 20).

「日本の美術館における作品解説文を英語に翻訳する上で、原文をそのまま翻訳すること（異質化翻訳）の効果」について把握するため、これまでに筆者が担当する「翻訳演習１」「翻訳演習２」を受講し上記の美術翻訳プロジェクトに参加したことのある学生を主対象に質問を行った。（2021年９月22日「英語ゼミナールⅣ k」／2021年９月27日「翻訳演習２」：筆者担当科目 受講生 計30名（実践英語学科３年生・４年生）のうち25名の回答（全て自由記述形式）を得た（１人複数の回答））。

その結果、回答数の多い順番に（１）「日本文化の尊重」（２）「書き手のメッセージの尊重」（３）「異言語・異文化の顕在化」に分類することができた。

【表３】

	美術翻訳における異質化翻訳の効果
1	日本文化の尊重
2	書き手のメッセージの尊重
3	異言語・異文化の顕在化

以下に全回答を分類毎に示す。

（１） 日本文化の尊重：

「日本文化を伝えることができる」「日本文化を知らない外国人に感じてもらうことがで

きる」「日本文化の尊重を表すことができる」「外国人にとっても日本文化を知る良いきっかけになる」「例えば袴をそのまま Hakama と翻訳することでより日本らしさが感じられる」「日本文化をそのまま伝えられる」「日本らしさが伝わる」「日本のありのままの文化背景を感じてもらえる」「日本文化そのものを受け入れてもらう効果」「その作品本来の良さが残せる」「海外の方に日本文と同じ意味合いで伝わるので、同じ感覚で楽しむことが出来る」「文章から日本らしさが出る」「美術作品には、その作者の生きている国や時代の文化が反映されているため、その文化における実際の名称などを別の外国語に置き換えたり意訳したりするよりも、より実際の言語の解説文の質感が楽しめる」「日本の言葉や文化を知ってもらう機会が増える」「日本語の表現や言い回しをそのまま感じることができ、より日本文や言語の理解が深まること」「海外の人が独自の日本語を知れて、より日本文化に触れることができる」。

（2） 書き手のメッセージの尊重：

「原文を書いた人の説明をストレートに伝えることできる」「作者のメッセージを伝えられる」「作者の作品に対する思いや意図をそのまま伝えることができる」「美術品に対する翻訳者の感性が一切入らないことがメリットである」「美術作品について詳しく理解している日本語解説文の書き手の想いがそのまま反映されるため、その美術作品の素晴らしさを直接的に感じることができる」「原文の作者がまとめた要点や伝えたいことを一番尊重することに繋がる」「作品に対する作者の意図を正確に伝えることができる。原文をそのまま翻訳することで、間違った情報を来館者に与えない」。

（3） 異言語・異文化の顕在化：

「日本語の文の構成のまま英語に変えるため外国人にとっては違和感が残るような訳になる。異国にいると改めて感じられると思うのでその感覚を楽しむことができる」「例えば、水墨画や日本特有の焼き物には、日本特有の精神や考え方が組み込まれていることが多く、英語に翻訳するのが難しい場合がある。そのような場合にも、日本語の原文そのままに翻訳することで、対比して見ることができ、英語と日本語の解説文を読んで分からない単語を調べることができる利点がある」「受容化された文章よりも印象に残り、興味が湧く効果。例えば、「桜」という言葉を“cherry blossom”ではなく“Sakura”と表記していた方が異国感を感じ、もしも桜が何か分からない場合に自分で調べる行為があると印象に残りやすいと考えられる」「プラスの効果としては、翻訳文としての多少の違和感があっても、翻訳先の文化にはない翻訳元の独自の文化や考え方や言葉の微妙なニュアンスを感じることが出来る。マイナスの効果としては、原文をそのまま訳そうとしたせいで、翻訳先の言語としてあまりにもかけ離れた、文章として成立していない文章を作ってしまった場合、意味のよく分からない解説文になってしまう可能性がある」「異質化翻訳は日本語特有の

表現を補って表現出来ない為、デメリットが多い」「日本にしかない美術の技法や文化が上手く翻訳されないと、作品本来の魅力が伝わりにくいという良くない効果も考えられる」。

以上の回答からも分かるように、日本の美術館における作品解説文を英語に翻訳する上で、原文をそのまま「異質化翻訳」することは、日本文化や書き手に対する尊重を意味する。しかし、異言語や異文化が顕在化することは、外国人来館者にとって異国情緒だけでなく、違和感や理解不足をもたらす原因にもなり得る。

4-2. 目標言語の立場：英語で日本文化を受け取る外国人来館者

起点言語の立場に対して、ここでは目標言語の立場から分析していく。英語で日本の美術作品を鑑賞する側が、異質な文化としてではなく、作品をより身近に捉えるには「受容化翻訳」を行う必要がある。「受容化翻訳（domestication）」とは、異質化翻訳に対して、起点テクストを目標文化の価値に合わせる翻訳方法である。“an ethnocentric reduction of the foreign text to target language cultural values” (Venuti 1995: 20).

「日本の美術館における作品解説文を英語に翻訳する上で、外国人来館者にとって分かりやすいように翻訳すること（受容化翻訳）の効果」について把握するため、これまでに筆者が担当する「翻訳演習１」「翻訳演習２」を受講し上記の美術翻訳プロジェクトに参加したことのある学生を主対象に質問を行った。（2021年９月22日「英語ゼミナールIV k」／2021年９月27日「翻訳演習２」：筆者担当科目 受講生 計30名（実践英語学科３年生・４年生）のうち25名の回答（全て自由記述形式）を得た（１人複数の回答））。

その結果、回答数の多い順番に（１）「外国人来館者による理解の向上」（２）「外国人来館者の関心を高める」（３）「外国人来館者の知識を深める」に分類することができた。

【表４】

	美術翻訳における受容化翻訳の効果
1	外国人来館者による理解の向上
2	外国人来館者の関心を高める
3	外国人来館者の知識を深める

以下に全回答を分類毎に示す。

（１） 外国人来館者による理解の向上：

「分かりやすいので、その作品の魅力が伝わりやすい、受け入れられやすい」「日本文化を知らない外国人が理解してもらいやすくなる」「来館者の親しみのある文化に合わせて翻訳することで、より理解が深まる。例えば、アメリカ人だと「それってアメリカで言う

～みたいな感じか！」と自国に置き換えて考えることができる」「例えば外国人の子供のように、日本文化を詳しく知らない人にも説明が伝わる可能性が高い」「初めて見る人にとっても理解しやすく多くの人を対象にできる」「作品について深く理解することができる」「文化を誤解することなく理解できる効果」「日本の美術館に置いてあるものはそもそも外国人にあまり馴染みがないものが多いと思うので、外国人が分かりやすいように翻訳する方がどういうものか理解しやすい」「誰かに細かく説明してもらわなくても美術館の作品の理解を深めることが出来る」「翻訳されていることに違和感なく読める」「日本特有の展示品（刀など）の海外にない製造技術の説明や使用している材料などは必ず分かりやすい表現に変えることが必要なので､そういった点への正確な理解を深めることに繋がる」「作品についても理解度が増す効果」「外国にはない言葉をそのままローマ字で翻訳してしまうと、英語で書かれていたとしても理解することができない。受容化翻訳することで、より分かりやすく想像しやすくなる」「分かりやすいように翻訳することで、作品をより深く理解してもらえる。分かりやすく翻訳することで、外国人来館者の記憶に印象的な作品として残るかもしれない」。

（2） 外国人来館者の関心を高める：

「より興味を持ってもらいやすい」「色々な人に親しみやすくなる」「美術作品は見るだけでも様々な感じ方や楽しみ方が出来るが、そこに英語での説明文でのサポートが加わった方がより興味が湧いてもらえる」「分かりやすく翻訳すれば、多くの外国人来館者がその日本の美術館が気に入り、来やすくなる」「分かりやすい解説をしていると、特に日本美術の分野に興味を抱いている外国人の来館が将来的に増える利点がある」「外国人来館者が他国の文化や背景を詳しく知らなくとも、その場で作品を楽しむことができる」「外国人来館者に日本文化に対して親しみや興味を持ってもらうことが出来る効果」「読み手に分かりやすいように翻訳する受容化翻訳には、日本のことをよく知らない外国人来館者にとっても読みやすくその作品に対して更なる関心を引き出す効果がある」「受容化翻訳がされていることで解釈の幅が広がり、作品鑑賞の楽しさが増す」「難しい単語や日本語特有の表現を分かりやすく言い換えると、作品の見方が変わり、関心が高まる」「外国人来館者に分かりやすい訳にすることで、作品鑑賞を楽しんでもらえ、他の日本の美術館にも興味を持ってもらえるかもしれない」。

（3） 外国人来館者の知識を深める：

「外国人にも作品を観てのみ得られる魅力だけでなく、その作品が生まれた文化背景なども含めた知識面も詳しく知ってもらい、更なる魅力を知ってもらえる」「分かりにくい単語に関しても翻訳文の中で補足説明されていることで、読み手がわざわざ調べる手間を省く効果」。

以上の回答からも分かるように、日本の美術館における作品解説文を英語に翻訳する上で、外国人来館者にとって分かりやすいように「受容化翻訳」することは、外国人来館者が非言語である作品を感覚として捉えるだけではなく、言語を通して作品に対する理解や関心を高め、知識を深める効果が期待できる。

4-3. 異質化翻訳と受容化翻訳

美術作品についての印象は個々によって様々な解釈があってよい。美術館に展示している非言語の作品を鑑賞するだけでも十分である。現に解説文を読まない鑑賞者もいるかもしれない。しかし、外国人来館者が日本文化を享受するためには英語版の解説文を併記することは少なからず効果的である。ここでは、作品の異質性を強調する「異質化翻訳」と、作品の親和性を促進する「受容化翻訳」について比較を行う。

以下に【表３】で示した「美術翻訳における異質化翻訳の効果」と【表４】で示した「美術翻訳における受容化翻訳の効果」について比較したものを提示する。

【表５】

	＜美術翻訳における異質化翻訳の効果＞	＜美術翻訳における受容化翻訳の効果＞
1	日本文化の尊重	外国人来館者による理解の向上
2	書き手のメッセージの尊重	外国人来館者の関心を高める
3	異言語・異文化の顕在化	外国人来館者の知識を深める

上記の【表5】が示すように、美術作品についての日本語解説文を英語に「異質化翻訳」する場合は日本語や日本文化という起点言語や文化を尊重するあまりに、目標言語の英語において違和感が生じる場合があるのに対して、「受容化翻訳」する場合は目標言語や文化である英語圏文化に配慮するため、外国人来館者に対して作品の魅力をより効果的に伝えることが可能である。

野崎が翻訳家を音楽家に例えているように「「ありのままを示す」ために仲介人はどうすればよいのかという難問にたちまちぶつかる点においても、音楽と翻訳はあまりにも似ている」（野崎 81）。つまり「原文に対して逐語的忠実さを心がけるのか、あるいは鑑賞者の心を揺さぶることを目指して積極的に意訳もするのか。そうした二者択一がつきまとう点でも両者は酷似する」（野崎 81）。また、そもそも「翻訳という「意図的な」行為が、同一性と差異の二重性を表現する言語の本質に重なったとき、翻訳言語にはまさしく単一の意味は存在し得ず、他者の言語の存在が多重性の中に介入していることになる」（早川 31）。

一方、【表 1】で示した「美術翻訳（言語）の過程における作品画像（非言語）の効果」

と【表4】で示した「美術翻訳における受容化翻訳の効果」について比較したものを以下に提示する。

【表6】

	＜美術翻訳の過程における非言語の効果＞	＜美術翻訳における受容化翻訳の効果＞
1	翻訳者が選ぶ単語や表現を工夫	外国人来館者による理解の向上
2	翻訳者の理解を深める	外国人来館者の関心を高める
3	翻訳者が想像しやすい	外国人来館者の知識を深める
4	翻訳者の関心を高める	

上記の【表6】が示すように、特に美術作品についての解説文を翻訳する場合は、非言語である作品の画像写真を参照することによって、翻訳者の理解は深まり関心を高める効果がある。それに対して、言語による解説文が自国の言語や文化に合わせて分かりやすく翻訳されることによって、非言語である美術作品を鑑賞する外国人来館者の作品に対する理解度や関心度を促進させる効果が見込まれる。したがって、美術作品において、「非言語」資料が言語を翻訳する上で翻訳者にとって有益に機能するのに対して、非言語である美術作品を外国人来館者が鑑賞する際には「言語」が支柱となり得る。

おわりに

本稿の目的は、美術作品における言語と非言語の役割を検討し、非言語である美術作品を理解しようとする外国人に対して言語がもたらす効果を考察し、美術翻訳における言語と非言語表現の相関関係を明らかにすることであったが、その結果として以下の5点が挙げられる。

（1）日本の美術作品について日本語から英語に翻訳する場合は、短い文章の中に豊富な情報を明快かつ具体的に「言語間翻訳」する事によって、非言語である美術作品の存在意義を強調することが出来る。

（2）美術作品についての解説文を日本語から英語に翻訳する過程で、その作品の画像写真を見ることによって、解説文における言語表現からだけでは把握できない作品の細かい特徴について想像し、選ぶ単語や表現をより精確に工夫を凝らし、画像写真なしで翻訳する場合よりも翻訳者が作品に対して理解を深めることが出来る。

（3）大学の授業で行う翻訳が、実際の美術館に展示される可能性があることを意識しながら翻訳作業を行うことは、実践的な経験として学生たちの意欲向上に寄与している。日

頃から英語に関心のある学生たちが欧米文化だけではなく、日本の文化や歴史を再考し、地域と連携しながら地元に貢献できる教育的効果を発揮している。

（4）美術作品についての日本語解説文を英語に「異質化翻訳」する場合は日本語や日本文化という起点言語や文化を尊重すると却って目標言語の英語において違和感をもたらす場合があるのに対して、「受容化翻訳」する場合は目標言語や文化である英語圏文化に配慮した結果、外国人来館者に対して作品の魅力をより効果的に伝えることが可能である。

（5）美術作品においては、言語を翻訳する上で非言語資料が有用であるのに対して、非言語表現である作品を鑑賞する際には目標文化に適した言語が外国人来館者の理解を深める。

謝辞

就実大学人文科学部実践英語学科の英語ゼミナール／翻訳演習のクラスにてご協力くださった学生の皆様に感謝致します。

本学人文科学部との連携協定に基づき翻訳プロジェクトを実施している岡山県立博物館／倉敷考古館／林原美術館の皆様に感謝致します。

引証文献

Goodman, Nelson. *Languages of Art*. Indianapolis: Hackett Publishing, 1976.

Jakobson, Roman. ‘On Linguistic Aspects of Translation.’ Lawrence Venuti ed. *The Translation Studies Reader*. Second Edition (pp. 138-143). New York: Routledge, 1959/2004.

Venuti, Lawrence. *The Translator’s Invisibility: A History of Translation,* London and New York, Routledge, 1995/2008.

グッドマン, ネルソン. 『芸術の言語』（戸澤義夫・松永伸司訳）. 東京：慶應義塾大学出版会, 2017.

野崎歓. 『翻訳教育』. 東京：河出書房新社, 2014.

早川敦子. 『翻訳論とは何か』. 東京：彩流社, 2013.